

はじめたです！（「はじめまして」もしくは「ご無沙汰です！」）のすたる山翡翠と申します。

4回目の参加ですが、はじめましての方、よろしくお願ひします。リピートの方、また来て下さって本当にありがとうございます！

「のすたる山翡翠」では、1980年代半ばまでのパソコンやソフトを展示します。試遊もできます。パソコンゲームはファミコン等のゲーム機と比べると、動きがぎこちない部分もありますが、これも「独特な個性」と捉えて頂ければ、と思います。。

そして、これまでの配布物は、少数ながら持参しましたが、サーバーにもアップしました。
こちら（http://lexus-is-gs-ls.sakura.ne.jp/nostal_yamasemi/）もしくは（→）のQRコードからどうぞ！



■ シャープパソコンの御三家！？...MZ & X1 & X68000

創生期のパソコン（マイコン）メーカー御三家といえば、シャープのMZ・富士通のFM・NECのPC80/88シリーズ（のちにPC98）でしたが、そのなかでもシャープのパソコンにフォーカスを当てたとき、パソコン御三家といえば「MZ/X1/X68000」ではないでしょうか？

MZシリーズはパソコン草分け的存在です。MZ-80K/C/K2E～MZ-1200 /MZ-700/MZ-1500と発売されました（※別路線でハイエンドなMZ-80B/MZ-2000/MZ-2200/MZ-2500も有）。私の愛用機種はMZ-700ですが、詳細は、過去の配布物に説明があるのでハブキます。MZ-700は、私自身が最初にプログラム（BASICやアセンブラー等）を覚えた思い入れの深いマシンです。

MZ-700が発売された1982年11月、同時期にシャープは別事業部（テレビ事業部）から画期的なマシンを発売しました。それがX1です。正式な型番はCZ-800といいました。何が画期的か？MZシリーズに比べ表現力が大幅にアップした事（グラフィックスとサウンド）ですが、なんと「テレビとパソコンの映像を重ねて映す事ができた」のです。「スーパーインボーズ機能」といいましたが、これは斬新！今までのパソコンにはありませんでした。なので「パソコンテレビ」という愛称が付きました。ただスーパーインボーズ自体実用的ではなかったよう…（テレビと重ねると結局見づらくなるから…）。

グラフィックスとサウンドは同時期に富士通から発売されたFM-7と同等でしたが、初期のX1ではグラフィック機能はオプションでした。後のマイナーチェンジで標準装備され、価格も下げられたので、そこがX1のホントのスタートラインだったのでは？と思ひます。

マイナーチェンジ版は、初代X1が発売された1年後に発売されました。X1C・X1Dと2タイプありました。前述したようにグラフィックス機能が標準装備となりました。X1Cは価格が抑えられたモデル。X1Dは3インチフロッピードライブを2基搭載したモデルでした。3インチフロッピーは、発売当初は「時代の先端を行く！」感があり、期待していましたが、5インチフロッピーに押されてしまい、短命に終わってしまいました（後述）。

X1はその後もマイナーチェンジを続け、X1Turboとなりました。しかし、一方で超高性能（当時）マシンX68000が発売されました。X68000はすべてにおいて高水準ゆえに瞬く間にフラッグシップ機となり、ソフトメーカーもX1からX68000にシフトしてきました。

その後、X1シリーズはフェードアウトしていきましたが、「X1は当時の8ビットパソコンの中では最強のパソコン」と今でも思っています。

X1については、X1Dを展示します。この機種、X1シリーズの中でも「悲運」と呼ばれたらしいです。その原因是3インチフロッピードライブの採用と電磁メカカセットデッキが非搭載だった事にあります。この機種が発売された当時フロッピーは5インチが標準でした。当時は高価でしたが、徐々に低価格化され、PCIに内蔵されるのも当たり前となっていました。そんな中、さらに「3.5インチフロッピードライブを内蔵したパソコン」も続々登場し始め、フロッピーは5インチと3.5インチの2種類が共存する時代となりましたが、X1シリーズは5インチフロッピードライブ搭載の道に進み、それはX68000にも引き継がれました。そんなわけで、3インチフロッピードライブという異色なドライブを搭載したX1Dは5インチ・3.5インチフロッピーにもあやかれず、加えて電磁メカカセットデッキ非搭載だったため、孤立状態となり、対応ソフトも発売されなくなりました。これが「悲運」と呼ばれたゆえんです。まあ外付けカセットレコーダーを接続すれば、たいていのカセット版は動作したのですが（カセットデッキ制御機構を使っていないものに限る）。なお、X1Dは「有志」（=勇者？）が5インチフロッピードライブに対応させたり、電磁メカカセットデッキの制御機能を追加したり、などの改造が施された非公式モデルも存在していました。「何事もやればできる！」んですね～。



展示ではいくつかのゲームを動かす予定です。今のゲームに比べると動きは明らかに悪いですが、当時としては完成度は非常に高かったものばかりです。「昔はこんなに頑張っていた！」というを感じて頂ければ幸いです。

ところで、X1の映像信号はMZ-700やFM-7と同じ規格なので、ディスプレイやケーブルは共用できます。しかし、X1の背面にあるディスプレイ接続はMZ-700やFM-7で扱っている「8ピンのDINコネクタ」ではなく、「6ピンのDINコネクタ」なのです。6ピンのコネクタを持つケーブルはさすがにもっていなかったため、秋葉原の部品屋で部材を調達して変換ケーブルを作成、めでたく（↑）の画像のように映し出すことができました。

■X68000...シャープパソコンの最終形態！？

X1のところでも説明しましたが、X68000はX1の後継機種です。高機能グラフィックス・多重和音のFM音源・ハードウェアスクロール機能・スプライト機能など…ファミコンなどのゲーム機に搭載されている機能が惜しみなく標準装備されていました。そして、それらを快適に動作させるべく、CPUは機種名が示す如く、68000(モトローラ製の16ビットMC68000)が使われており、とても高性能なマシンでした。前身のX1含め、これまでのPCで苦労していたスムーズな動きや多色グラフィック・重ね合せ処理もあらかじめ持ち合わせた機能のおかげで難なく実現できたのです。

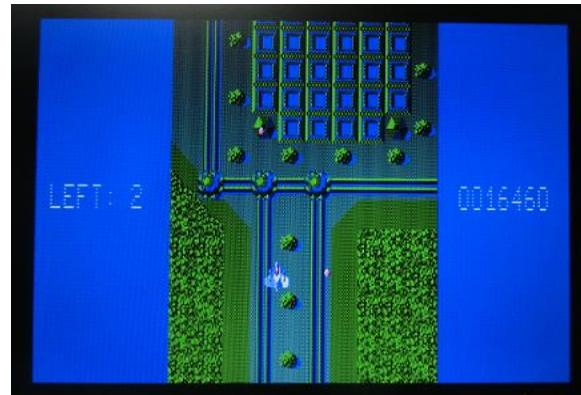
X68000は毎回展示してきましたが、今回も「シャープ御三家」(！？)のフラッグシップ機の名目で展示します。その実力は会場で確認してください(笑)。

■富士通の刺客！？FM-7

1981年～1982年、グラフィックスが高水準のパソコンは存在しましたが、値段は20万以上が当たり前、そしてサウンド機能はありませんでした(BEEP音のみ、もしくはあっても単音)。そんな時代、1982年11月に高水準グラフィックス(640x200ピクセル)、PSG音源による3重和音を搭載して、値段も126,000円という当時としては低価格なマシンが登場しました。それがFM-7です。同時期にシャープからは前述のMZ-700やX1が発売されましたが、MZ-700はフルグラフィックス非搭載、X1は最初はグラフィック機能がオプションだったため、グラフィックスやサウンド機能を最初から搭載しているFM-7は大きく脚光を浴びました。

ハードウェアをフルに活かすには相当な技術力を必要としましたが、「NOBO」(上段)・「SONICBOOM」(下段)は、その典型な作品と言ってよいでしょう。

SPECIFICATIONS	
Processor	68000/2MHz/12
User RAM	32-64K bytes
BASIC ROM	32K bytes (F-BASIC Version 3.0)
Video RAM	48K bytes
Color	8 colors
Graphic Resolution	640x200
Sound	Programmable Sound Generator
Option	Mini Floppy Disk(320K bytes x 2) RS-232C Interface card Kanji ROM card 200 card etc.



NOBO(上)・SONICBOOM(下)
ともに縦スクロールシューティングですが、完成度は非常に高いです



■おわりに

80年代のパソコンについては、非常に思い入れが深く、まだまだ書き足りない事がありますが、そろそろこの辺で…。
ファミコンをはじめ80年代のゲーム機(特にPCエンジン)もなかなか思い入れがあるのですが、今回はパソコンにフォーカスしました。
ゲーム機よりも制約が多数あるパソコンでも「ここまでできるぞ」という事が伝わったらしいな、と思い、オシマイにします。

ありがとうございました！！